# 愛の目録

# 愛の目録

尾崎秀樹・恵子

愛の目録　小説のなかの女*101*
©Hotsuki Ozaki, Keiko Ozaki　1982
一九八二年四月八日印刷
一九八二年四月二〇日発行
定価——九八〇円

著者——尾崎秀樹・恵子
発行者——菅沼眞吾
発行所——株式会社創隆社
東京都千代田区麹町四—五—二一　〒一〇二
電話　東京（〇三）二三九—三五一一（代表）
振替　東京九—一五六四四
印刷所——中央精版印刷株式会社

0095—104111—4292

愛の目録　小説のなかの女101／目次

作中人物の愛のありかた　7
まりこ◉現代女性の生理感覚　16
恵美子◉青春期の混沌　18
杉子◉性のもつ暗い魔力　20
サチ子◉主婦が恋に走るとき　22
すみ子◉無責任な同居生活　24
恭子◉時代状況の影を背負う　26
彼女◉ゆきずりの出会い　28
寿美◉明るさを失わない病妻　30
啓子◉人生を生きる〝戦友〟　32
杳子◉愛の底にゆらめく生　34
女◉孤独な現代人の一時の愛　36
志保子◉男と女の愛の差異　38
杏子◉婚前交渉の波紋　40
玲子◉女子高校生の結婚　42
安見子◉実らぬ絶対の愛　44
春子◉平凡な夫婦の軌跡　46
節子◉愛の空虚を否定して　48
女◉現代の孤独と不信　50
知子◉女の情念を燃やす　52
ミホ◉夫婦の愛憎の極限　54
志乃◉清純な愛をつらぬく　56
怜子◉うつろう青春の愛　58
せい子◉純粋に生きる悩み　60
蔦枝◉女ごころのあわれさ　62
初江◉輝く青春の健康美　64
エミ子◉組織にゆがむ愛　66
ふみ子◉短歌に託す恋の炎　68

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

忠子◉男性遍歴の心理 70
セキ◉農村の苦労に耐えて 72
キヨ◉男性社会への抵抗 74
国子◉献身が夫をしばる 76
道子◉道徳の壁を越えられずに 78
節子・満里子◉古い女・新しい女 80
雪◉内なる官能の欲求 82
彩子◉受け身の愛の悲劇 84
澄江・不二◉幸薄い底辺の女たち 86
巴◉内に秘めた純情 88
かず子◉旧道徳に逆らう女 90
彼女◉善と悪を内包した関係 92
駒子◉つよくなった女の心理 94
佐喜枝◉恋人への思慕断てず 96
ゆき子◉愛にすがり流れる 98
リツ子◉短い日々の愛の燃焼 100
美千子◉夫婦の強いきずな 102
春美◉肉体で反逆する女 104
英順◉歴史の傷がはばむ愛 106
加那子◉内面に秘めた"業" 108
貴乃◉人間の存在に潜む不幸 110
ふたば◉傷ついて知る父の愛 112
菜穂子◉屈折する愛の残像 114
ぬい◉自我に破れた俳人 116
多加◉寄席興行に賭ける女 118
蝶子◉放蕩男をささえる女 120
あき子◉愛におぼれない女 122
桂子◉才能ゆえの"愛の落差" 124

明子◉交錯する夫婦の愛憎　126
駒子◉燃えるひたむきな愛　128
美代◉愛に飢えて犯す罪　130
恵子◉湿った風をつき破る女　132
秋子◉淡い青春の恋と哀しみ　134
真知子◉思想的な愛の破局　136
伸子◉結婚生活の試練　138
もん◉捨てられた男への思慕　140
邦子◉目に見えぬ愛の亀裂　142
允子◉前向きに生きる女　144
トシヲ◉生一本で貫く一生　146
伸子◉自我の挫折と再生　148
瑠璃子◉男のエゴに復讐　150
信子◉妹の愛に身を引く姉　152
杉子◉一人の女と二人の男　154
万里子◉家庭と仕事に悩む　156
駒代◉花柳界に生きる女の愛　158
お島◉浮沈をくり返しながら　160
玉枝◉愛と愛欲のはざまに　162
喜和◉報われない献身　164
おはん◉一途に愛しつづけて　166
朋子◉自我の分裂に苦しむ　168
染乃◉国境を越えた愛　170
鶴代◉母なる大地のような女　172
民子◉初恋を胸に秘めて　174
葉子◉調和を選べぬ女の悲劇　176
藤尾◉驕慢がまねく破滅　178
芳子◉見せかけの新しさ　180

環◉過去に悩みつつ生きる　182
お蔦◉恩義の犠牲となった女　184
お宮◉捨てた愛の代償　186
浪子◉結核と家族制度に死す　188
お梅◉愛と義理とに悩む　190
お市◉たくましい河内の女　192
千代子◉冬の富士観測に挑む　194
お徳◉歌舞伎世界の陰で　196
お関◉忍従に涙する妻の典型　198
倫◉家をまもる苦しみ　200
お玉◉幸運の機会失った愛　202
すゞ・たつ◉女系家族の愛憎　204
おけい◉運命変えた維新の嵐　206
花江◉どん底で知った愛　208
おせん◉不幸の果ての真実　210
春琴◉突き放す裏返しの愛　212
加恵◉愛憎を胸に姑との闘い　214
政子◉尼将軍の愛と苦悩　216
娘への贈り物——あとがきにかえて　218
手軽に買える文庫本一覧　221

装幀　菊地信義　装画　本くに子

掲載紙

「新潟日報」昭和五十三年四月～五十五年四月
「信濃毎日新聞」昭和五十三年五月～五十五年六月
「日刊福井」昭和五十三年六月～五十五年八月
「日本海新聞」昭和五十五年五月～五十七年一月
「北海道新聞」昭和五十五年九月～十月／昭和五十六年三月
「徳島新聞」昭和五十六年一月～四月
「秋田魁新報」昭和五十六年十月～五十七年三月

# 作中人物の愛のありかた

## I

私たちが文学作品を読むのは、そこに何らかのたのしみを見出すからには違いないが、単にいろんな知識を得たり、娯楽のためだけではなく、それによって心の糧をもとめるところに、大きな意味があるのではなかろうか。

小林秀雄は「一般読者にとっては、あらゆる文学的意匠は存在しない。ましてや純文学と通俗文学の区別などありはしない。彼らは手ぶらで扱われた題材の人間的興味の中にずかずか入って来るだけだ」と書いたことがある。これは一般読者のために書いてきた作家、菊池寛にふれた文章だが、読者が「題材の人間的興味の中にずかずか入ってくる」というのは、作中人物の運命にふかい関心をもつことをさしている。

文学作品の芸術的価値について、さまざまな論議が行われるのは当然だが、一般読者はそういった専門的な見方よりも、まず作中人物の心理や行動に興味をしめし、人間的感動をおぼえるものだ。

文学に限らず、芸術作品から受ける感動は、芸術的な感動と人間的感動の二種にわけられる。この両者は本来一体をなすものであり、芸術的感動がなければ真の人間的感動もあり得ないが、しかし読み手（または受け手）によって、どちら側からその作品に近づくかの違いはみられる。通俗的だといわれる作品であっても、ひろく読まれることが少なくないのは、人間的感動が芸術的感動に優先した結果であり、それらの読者たちにとって、その作品の内容が何より重視された証拠だともいえよう。

これら多数の読者にとって、文学の魅力はその形式より内容、とくに作中人物の心理や行動がどう描かれているかという点にかかっており、その運命に関心を抱くところから、作品への興味も生じる。そしてこの作中人物のありかたについて、読者と同じ次元でいろいろと考え、人間のさまざまな姿を追究するのが作中人物論であり、作家論や作品論とはやや立場をことにしているが、それも多くの人々から愛読される作品を、その内側からさぐるための一方法なのである。

作中人物の心理や行動、そして生きかたにたいする関心には、二つの要素がふくまれる。ひとつはその人物（たいていは主人公）にたいする共感だ。彼または彼女の悲しみや喜びを自分自身と比較し、一緒になって涙を流し、笑いを浮かべながら読んでゆく。あるときはその人物の青春の悩みに、自己の青春をかさねあわせ、あるいはまた彼らが未来を切りひらいてゆく姿に、自分もこのように生きたいと望んだり、はげまされたりするのは、この共感のあらわれだ。

もうひとつは、別の人生を知るたのしみである。作中の人物は、読者の知らない時代や環境の中で、それと対応しながら生きてゆく。読者には考えもおよばない冒険をしてみたり、はらはらする危



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

機にさらされたりするし、あるいはその能力や知識を発揮して、未知の世界に挑んだりする。読者は作中人物の動きにつれて、彼らの生きたひろい世界を知ることができ、自分の見聞までがひろがるような思いを味わうのである。

この二種類の興味は、小説のなかの愛にもあてはまるといえよう。読者はヒロインまたはヒーローの愛の悩みに共感し、その悲しみや喜びを自分の経験に即して理解すると同時に、自分たちとはまるきりことなる環境で、彼らがその愛をつらぬくためにどのように闘ったか、あるいは挫折せざるを得なかったかを知らされ、愛のありかたもけっして一様ではなく、それなりの歴史的変遷があり、個性による違いがあることを理解する。

こうした理解は、愛にたいする認識をひろげさせ、そこに自分の共感をかさねることによって、ゆたかな人生の知恵を身につけることにつながるように思われる。単にヒロインの運命に同情するだけでなく、その愛のありかたを正しく見つめることで、小説への興味がいっそうふかまることはたしかである。

## II

明治・大正・昭和前期、そして戦後へかけての時代の流れの中で、女性の社会的地位や権利は次第に拡大され、恋愛や結婚にたいする意識もまた大きく変わった。だがそこには、女性を家にしばりつけていた古い道徳に抵抗し、恋愛や結婚の自由をかちとると同時に、それを可能にさせる経済的な自

立をめざしてたたかってきた多くの女性たちがいたこと、にもかかわらず、古い社会の道徳は、根づよく残って女性を苦しめ、それがほとんど一掃されたのは、戦後になってからであることなどは、今さら言うまでもあるまい。

明治以後百年余にわたるこうした女性の歩みは、その時期ごとにおける文学の中に姿をとどめており、それらを拾い上げてゆくことで、三代の女性のさまざまな生きかたをみることができる。しかもそうした外側からの諸条件に加えて、女性特有の感情や心理の起伏が、それらの女性の個性的な像をつくり出しているわけだが、彼女たちの生きる姿勢がもっとも端的にしめされるのは、やはり愛の場においてではなかろうか。それほど愛の問題は、女性の一生にとって大きな比重をしめるといえよう。

昔から仕事や思想などに生きる男性とことなり、そうした道を閉ざされていた女性は愛にめざめることではじめて自我にめざめるといった例が多かった。直接社会の風にあたることの少なかった女性でも、ある男を愛したために、その愛を阻む社会の制約を知らされたり、また相手に裏切られて、男の中にひそむ封建性や自分本位な考え方をさとるといった形で、女としての自分自身と、男というものの裏、あるいはそれをとりまく社会の問題を、いや応なしに理解し、それにどう対決すべきかを考えざるを得なかった。

その結果、ある女性は自分に忠実に生きようとし、周囲の不合理とたたかって強さを身につけるが、反対に厚い壁にぶつかってあきらめを余儀なくされたり、そのたたかいに敗れてふかい悲しみに

沈んだり、または自暴の生活を送ったりという道をたどる女性もいた。それらは愛による自我のめざめを、人間的な成長に生かし得た女性と、そうでなかった者の違いであろう。だが前者の道をとった人々は、とくに学問や教養がなくても、愛をささえにして立派な人生を歩んだのである。

明治の末ごろから、近代的自我の確立をめざす女性たちがあらわれるが、彼女たちの場合も恋愛や結婚の問題にぶつかると、社会的な壁と同時に、自分自身に内在する弱さに気づくことが多かった。それを乗り越えていった女性と、弱さを露呈したまま、不幸な軌跡をたどる人のそれぞれの姿は、この時期から大正期にかけてのいくつかの作品に描かれている。

昭和期に入ると女性の意識も次第にすすみ、愛においても主体的な選択をしめす人がふえたが、家庭生活の中では男性上位の形は失われず、特別な人を除いて、いったん結婚すると女性は、家庭だけを守って過ごすという状態がほとんどだった。小市民的な幸福はあっても、それは社会との接触をあまりもたず、夫の愛だけによる従来の女性の暮らしとそれほどことなるものではなかったといえる。それだけに個人的な明暗はあり、文学に描かれた女性の姿も多様化して、さまざまな愛のかたちが作品に投影されるのだ。

だが戦争がおこると、ささやかな庶民の生活もその中にまきこまれ、恋人や夫や子どもを戦地へ送った女性たちの苦難がはじまる。愛をひき裂かれた悲しみの上に、女手で生活をささえなければならなかった女性たちは、しかしその経験によって大きく成長した。戦後、愛や性の自由がもたらされ、女性の意識が急速に変化したのはその結果であり、それまでにみられなかったタイプの女性も登場し

た。そして恋愛小説もまた変貌し、新しい愛のありかたが描かれることになる。

## III

明治の中期から末期へかけて新聞等に連載され、ひろく愛読された家庭恋愛小説は、現在でもその名を知られる何人かのヒロインを世に送り出したが、彼女たちはいずれも運命に翻弄され、愛の問題で悩みながらも、積極的にその運命を切り拓いてゆくタイプではないことに気づく。もちろん時代の状況がそれを可能にしなかったのだろうが、読者もまたかよわい女性である彼女たちの嘆きに、自分の悩みとも共通するものを、より拡大して見出し、一種の安心を感じたようだ。そして以後、新聞小説から演劇、映画の分野にこうしたヒロイン像が受けつがれ、現在でもテレビの恋愛ドラマのなかに登場することになる。

しかし本来、恋愛は女性にとってその主体性を発揮し、それをとおして人間的に成長する可能性を秘めたものであるはずだ。近代的な市民社会の成立を経ないで近代へ移行した日本では、男性も女性も容易には古い道徳観から脱け出せず、自由な恋愛をはぐくむ土壌ができにくかった。西欧の文学にみられる典型的な女性像の登場する恋愛小説が日本で書かれなかったのは、日本の近代文学自体の未熟さもあるが、こうした日本社会の特殊な条件を反映しており、愛を描いた外国の小説と比較して読むとその特殊性が理解される。その代わりに、日本では女性たちの家や男性にたいする抵抗が、さまざまな形で記されてきた。そして戦後になって、ようやく男女が対等の場に立って取り組む小説があ

らわれ、愛における女性の可能性も見直されるようになったといえる。

そのひとつは古い家のなかにありながら、生活に根を下ろし、一家をささえてきた女性の存在をたしかめたことだ。そのなかには明治・大正・昭和の三代をたくましく生き抜いた女性もいるし、また必ずしも一人ではなく、母から娘へさらに孫へと生命力を伝えてゆくケースもある。彼女たちの愛はつねに生活に即しており、苦難さえも自分の肥料として役立ててきたのである。男に裏切られ、夫の浮気に悩まされながらも、生活の場を離れずに営々と過ごしてきた女性たちの姿は、形を変えていくつかの作品に登場した。

一方、戦後の性の解放とそれにともなう新しい風俗は、多くの文学でとりあげられたが、なかには古い感覚がまだ残っていて、積極的な態度をとれない女性の悲劇もあり、新旧の世代の愛のありかたを対照的に描いた作品や、軽薄な風俗にたいする批判として、古い女性のもつ美しさに光をあてたものもあった。

女性の社会的進出とともに、愛の舞台も家庭から職場へ移り、学生どうしの愛も描かれるなど、多様化はいっそう進むが、しかし戦前までのような種々の制約がなくなったため、愛の質的変化がおこったことも見逃せない。かつては制約にたいする抵抗感が、愛をささえるエネルギーとして働いたが、その緊張感が失われた現代では、それに代わる生の充実感をもとめようとして、容易に得られないといった悩みに直面することになる。これは女性だけでなく、男性をもふくめた現象で、現代における愛の不毛がいわれるのもそのためであろう。

現代の愛を描いた作品には、愛の心理や生理を総体としてとらえるのでなく、その一部分を拡大し、掘り下げるといった傾向がみられるし、あるいは愛を目的でなく、過程として味わう人々の姿も少なくない。しかし形はどのように変わっても、女性にとって愛は自分をふくめて、人間と社会とを見つめる重要な契機をなし、成長のバネとしての役割をはたすのではなかろうか。

文学に描かれたさまざまな愛の姿は、過去から現在にいたる日本の女性のおかれた状況や、その苦難と努力のあとを教えてくれるとともに、自分自身を反省したり、今後の愛のありかたを考えるうえでのなによりの糧となるに違いない。いかに愛するかはそれぞれの女性がいかに生きるかということと、そのままかさなっているからだ。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo